

修士 (2014 年度)

近代幸福論再考 ——被災地・大槌町の人びとの〈生き方〉から——

神田雅史

1. 研究概要

本研究は、近代に目指された「幸福」に対して疑いのまなざしを向ける。筆者の幼い頃からの問い「人はなぜ生きるのか」への、筆者なりの答えである「幸福」に対し、被災地で生きる人の姿を軸に、接近を試みた。そして、本研究において明らかとなる産物は、本研究調査地である岩手県大槌町で出会った3人のインタビュー協力者と、近代の「幸福」に疑いのまなざしを向けた私との間で構築された、新しい「幸福」の発見である。

2. 先行研究

「幸福」という概念については、古くから多くの研究者、小説家、経営者など、様々な人が様々な考えを展開している。その見解は多岐にわたるが、未だに明確な答えは出ていない。社会学者のジグムント・バウマンは、「幸福」について、「単なる戦略上の都合から仮定されたものであっても、不確実性からの逃避は、あらゆるイメージで幸福を構成するうえで、最も重要な要素である」(Bauman 2008=2009:41)と述べる。

さらに、現代に溢れる「幸福」への先行研究を見ていくと、「幸福」追求の不幸という指摘が存在していることに気づく。バウマンの著書の解説を務めた山田昌宏も指摘するように、近代社会には、「幸福」を目指すことの強要された「不幸」が存在しているのである。私は、「幸福」の先行研究を見ていく中で、「幸福」を過去、現在、未来、コト、モノなど、切片化して捉えることの限界。また、「幸福」追求の不幸が指摘されているように、近代「幸福」を捉え直す必要性を強く感じた。それらの理由から「幸福」から出発した本研究は、切片として捉えられていた「幸福」概念を、生の全体としての捉えるために、「生き方」という新たな研究概念を手にする。そして、より「生」が切迫感あるものとして現れた被災地へ赴き、新しい「幸福」を模索していくこととなる。

3. フィールド調査と分析

本研究では、東日本大震災被災地である岩手県大槌町において2012年、2013年、2014年の3年間にわたり、計7回29日のフィールド調査を行った。大槌町は太平洋に面する上閉伊郡、三陸海岸のほぼ中央に位置し、大槌川と小槌川という2本の川が流れ、山、川、海に囲まれた自然豊かな土地である。調査においても多くの大槌町民が指摘していたように、まさに近代の発展という意味では「何もない」町であり、東日本大震災においては人口の約1割が犠牲となる大きな被害を受けた。そのような場所において、「幸福」はどのように存在しているのか。先の先行研究から得た研究概念の変遷のもと、大槌町に住む3人のインタビュー協力者にライフストーリー・インタビューを行い、それぞれの「生」への接近を試みた。インタビュー協力者は、町復興のために活動する一般社団法人「おらが大槌夢広場」で働く東梅和貴(20歳)さん。震災後、「何もない」大槌町でイタリア料理店「バ

ールリート」を経営する木村省太（30 歳）さん。そして、筆者も宿泊した「小川旅館「絆館」」の女将である小川京子（53 歳）さん。以下の 3 人である。

本研究における 3 人のライフストーリー・インタビューから、それぞれの「生」に独自の可能性を見出した。筆者はその「生」に、それぞれ「葛藤の生」（東梅さん）、「非求の生」（木村さん）、「宿命の生」（小川さん）と名づけた。東梅さんは、被災地に残る若者への期待と現実。夢を持って亡くなった先輩と、目標もなく生き残ってしまった自分。様々な葛藤の中で、自らの生の意味を模索しながら生きている。木村さんは、結果以上に「過程」を楽しむ姿勢、また、震災経験を含めた自身に起こる出来事に対して「俺の人生なんで」という言葉で引き受け、必要以上に求めない生き方を展開している。小川さんは養子として、物心ついた頃から旅館業を継ぐことが定められていた。その中で、「母親」（育ての母）を自らの「生」における重要な存在としながら、受動の中に「自由」を生み出し、定められた「生」を生きている。

4. 結論

3 人のインタビュー協力者の「生」から、近代社会の「生き方」や「幸福」に代わるどのようなものを提示することができるだろうか。結論では、これまでの議論を踏まえた上で、より一般化した形で、私の当初の問題関心である近代「幸福」の問い直しを行い、今後の「幸福」研究において重要となる視座を指摘した。

まず、パウマンの指摘する「不確実性の逃避」として、3 人の「生」からは「つながり」を見ることができた。東梅さんは、絶対的帰郷場所としての「大槌町」とのつながり（現在）。木村さんは、次世代に向けた「子ども」へのつながり（未来）。小川さんは、記憶としての「母親」とのつながり（過去）。これらの「つながり」は、それぞれの「生」を記憶し、「生」を生き、「生」を託していく姿であり、「生」という大きな不確実性からの「逃避」としての形であると考えることができる。

また、パウマンの「不確実性の逃避」とは異なる形として、「不確実性の受容」という姿勢を見いだした。木村さんは、自身の家庭環境や震災経験などの不確実性を、「俺の人生」として引き受けていく。小川さんは、千年に一度の大災害を経験したことに対して「それも運命」として受け止め、また、これまでの「養子」「旅館業」などの定められた経験を受動している。これらの「生き方」は、不確実性をリスクとして捉え、支配、制御、または逃避する形ではなく、不確実性を「受容」する態度として捉えることができるだろう。それは、決して絶望や諦めとして存在しているのではない。不確実性を引き受ける形で対処する態度は、近代ではおろそかにされがちな、不確実性をそのままに「受容」していく姿なのである。

今後の「幸福」研究における視座としては、「幸福」を切片として捉えるのではなく、「生」の全体の中で、立体的に見ていく必要があることを指摘したい。また、私たち他者は、人の「何が」幸福であるかではなく、「なぜ」幸福であるかについてのみ考えることができることも、本研究において気づくことができた。そして、「幸福」は「何か」として示されるものではなく、その意味で「幸福」研究は、決してその「答え」を見つけるには至らない。しかし、だからこそ意味があり、社会の中で終わらないプロセスとして継続していくのである。「幸福」は「生」の中で探し続けられるものであり、それゆえに人は「生」を歩むの

ではないだろうか。これこそが、まさに「幸福」が人の生きる目的として存在している理由であり、「人はなぜ生きるのか」という本研究の最初の問いへの筆者の回答である。

参考文献

- Zygmunt Bauman, 2008, *The Art Of Life*, Cambridge: arrangement with Polity Press. (=2009, 高橋良輔・開内文乃訳『幸福論——“生きづらい時代”の社会学——』作品社。)
- 山田昌弘, 2009, 「訳者あとがき」Zygmunt Bauman『幸福論——“生きづらい時代”の社会学——』作品社: 275-281.
- 山田昌弘・電通チームハピネス, 2009, 『幸福の方程式——新しい消費のカタチを探る——』携書デイスカバー。